

新潟県のスモン患者の現況

松原 奈絵（国立病院機構西新潟中央病院脳神経内科）
高橋 哲哉（国立病院機構西新潟中央病院脳神経内科）
長谷川有香（国立病院機構西新潟中央病院脳神経内科）
黒羽 泰子（国立病院機構西新潟中央病院脳神経内科）
小池 亮子（新潟リハビリテーション病院脳神経内科）
三瓶 一弘（新潟県厚生連佐渡総合病院脳神経内科）
福島 隆男（新潟県立新発田病院脳神経内科）

研究要旨

令和３年度の新潟県のスモン患者の現況について報告した。受診者は男性４名女性９名の１３名で、受診率は６１．９％であった。継続受診者が多く経年変化を捉える事が出来ているが、高齢化に伴い受診者の減少傾向は続いている。継続受診者の日常生活動作、要介護度などは年々低下していて施設入所や長期入院が増加している。昨年度からの新型コロナウイルス流行の影響もあり、今後も非対面調査が増えていくと考えられるが、現況を把握し個別の支援につなげていくためには介護職員などへの働きかけも必要と思われた。新型コロナウイルス感染症流行も２年目となり日常生活や体調面で不調を訴える割合が増加しており注意が必要である。

A．研究目的

令和３年度の新潟県スモン検診を通して患者の現況を調査、またこれまでの結果との比較を行い、状況の推移を把握し、日常生活や医療・福祉における課題を明らかにし、患者の支援に役立てることを目的とした。

B．研究方法

県内在住で連絡可能なスモン患者２３名に対し、検診案内を送付、検診希望者に対し医療機関での個別検診ならびに訪問検診を実施した。対面調査が困難な例では書面による調査と電話による補足調査を行い、面会制限中の施設入所者については、家族の了承を得て施設職員に趣旨を説明し調査を実施した。

また昨年に引き続き、新型コロナウイルス感染症流行による心身への影響について、アンケート調査を行った。

（倫理面への配慮）

患者の調査項目に関しては、検診時に結果の解析・発表について口頭、または署名で同意を得た。また、当研究における倫理審査状況及び利益相反の管理について、当院の倫理審査委員会の承認を得た。

C．研究結果

今年度の検診受診者は男性が４名、女性が９名（調査票提出期限後に提出された施設入所者の女性１名を含む）の１３名で、受診率は６１．９％であった。年齢は７５～１０２歳で、平均８４．１歳、昨年度よりちょうど１歳高齢化していた。医療機関での検診が８名、訪問検診が２名、書面での調査が１名、施設職員への調査が２名であった。療養状況は、在宅が１０名、長期入院が１名、施設入所が２名であった。１３名全員が継続的な医療を受けていて、介護保険は６名が利用していた。Barthel Indexの平均は、６２．３点で、昨年度より２．７ポ

イント低下していた。継続受診者 9 名の推移では、70 歳代、80 歳代の群での低下は緩やかで 90 歳以上の群で近年の急激な低下が目立った（表 1）。

障害度は極めて重度が 4 名、中等度が 4 名、軽度 5 名で、障害要因の推移はスモン単独は 2013 年度には 3 名であったが、今年度は 1 名のみで、脳血管障害や循環器系疾患、脊椎疾患、悪性腫瘍など加齢による疾患の併発が障害度に及ぼす影響が大きくなっている。

継続受診者の療養状況、日常生活介護状況、介護認定結果、介護不安について 2013 年度の結果と比較すると、療養状況では施設入所あるいは長期入院は 1 名のみから 3 名に増加していた。日常生活介護状況では介護不要が 7 名から 5 名に減少し、全介助は 4 名から 5 名に増加、軽介助を要する者の割合が増加していた。

表 1 令和 3 年度新潟県スモン患者検診結果
実施期間：2021 年 7 月～10 月

受診患者	13 名（男性 4 名、女性 9 名） 受診率 61.9%（新規受診者 0 名）
年齢	84.1±8.9 歳（75～102 歳）
検診実施場所	病院検診 8 訪問検診 2 書面＋電話調査 1 施設職員に依頼して調査 2
療養状況	在宅 10 施設入所 2 長期入院 1
受療状況	継続的な治療あり 13 なし 0
介護保険	申請 あり 6 なし 7
Barthel Index	62.3±41.9（95～0）

介護保険は申請なしが 9 名から 7 名に減少、要支援 2 が 1 名、要介護 2 が 2 名、要介護 4 が 1 名、要介護 5 が 2 名であった（図 1）。

介護不安がないとの回答割合は半減し、不安がある、わからないとの回答が 70 歳代の群で増加していた。内容では介護者の高齢化や健康問題についての不安が主なものであった。

新型コロナウイルス感染症流行に関するアンケート調査は送付した 23 名中 14 名から回答を得た。医療に関しては昨年度とほぼ同様に影響がないとの回答が 8 名で 6 割を占めたが、介護に関しては影響がないとの回答が 6 名で増加し、大いに影響がある、かなり影響があると回答したものはなかった。日常生活や体調に関しては、運動不足や外出機会の減少を反映して影響があるとの回答が増えていた。ワクチンは予定も含めると体調不良の 2 例を除き全員が接種していた。

D. 考察

今年度の検診は 13 名が受診した。新潟県では継続して受診する者が多く、受診者が固定化してはいるが、個別検診の調整や訪問検診の実施などのきめ細かな対応により検診の意義が周知されていて、経時的な現況変化を追跡することができている。

対面調査が実施できたのは 10 名で、他は書面調査が 1 名、施設職員への聞き取り調査が 2 名であった。施設入所者は新型コロナウイルス感染症流行下で、家

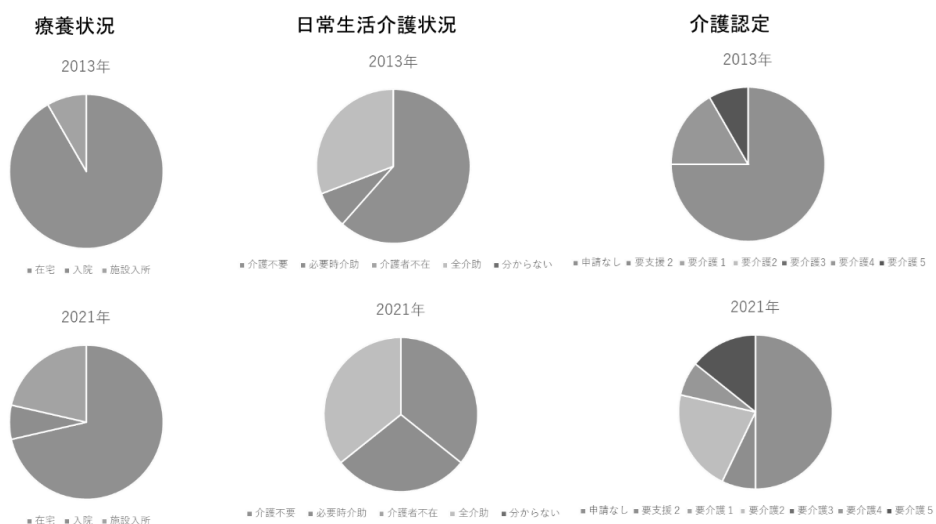


図 1 療養状況・日常生活介護状況・介護認定 2013 年度との比較

族も面会制限のため現況が把握できておらず、施設職員の協力が得られ情報を得る事が出来て有用であった。またこの機会を利用してスモンについて職員に簡単ではあったが説明することもできた。

年々、脳血管障害、循環器系疾患、整形外科疾患、認知症などの併発症が多くなっていて、スモンよりも障害度に及ぼす影響が大きくなってきている。

要介護度は経年的に上がっており、日常的に軽介助を要する者が増えてきている。

介護不安については、70歳代の群で介護者の高齢化や不在を不安に思うとの回答が多かった。加齢に伴い身体の機能低下を自覚し、介護問題が現実的な不安となっているのだろうと思われる。

今回3名に非対面調査を実施したが書面のみでの現況把握には限界があり、今後非対面が増加すると予想されることから、質問項目等に工夫が必要と思われた。

コロナウイルス感染症流行に関するアンケート調査の結果では、流行も2年目となり、日常生活や体調の面で不調を訴える割合が増加しており、注意が必要と思われた。

E. 結論

令和3年度の、新潟県におけるスモン患者の現況について報告した。継続受診者が多く経年的な変化を捉える事が出来ているが、高齢化に伴い受診者の減少傾向は続いている。昨年度からの新型コロナウイルス流行の影響もあり、今後も非対面調査が増えていくと考えられるが、より個別に現況を把握し、支援につなげていくためには介護職員などへの働きかけも必要と思われた。新型コロナウイルス感染症流行も2年目となり日常生活や体調面で不調を訴える割合が増加しており注意が必要である。

G. 研究発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

I. 文献

- 1) 小池亮子ほか：新潟県スモン患者の10年間の変化．厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）スモンに関する調査研究班・平成26年度総括・分担研究報告書 P79-81, 2015.
- 2) 小池亮子ほか：新潟県におけるスモン患者の現況．厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）スモンに関する調査研究班・令和2年度総括・分担研究報告書 P86-88, 2021.